

青葉ちゃんとひふみ先輩が泊まり作業中に

— やってきた変質者に陵辱されちゃう話 —



○補足

- 青葉の18歳という年齢はコミック1巻～3巻時点のものです。
- ひふみ先輩が(1巻～3巻時点で)24歳というのは、初期設定や作中の情報から推測して有力とされる年齢で公式の年齢ではありません。ひふみ先輩の年齢は原作でも不明のままです。
- 二人が処女なのは公式です。



18歳！

24歳？



青葉ちゃんとひふみ先輩が泊まり作業中に

— やってきた変質者に陵辱されちゃう話 —



「……………」
「だ、誰ですか……あなたたち……………」
「ここはイーグルジャンプの関係者以外は……………」

「誰って、そりゃ不法侵入者だよ」
「騒ぐなよ……騒いだら刺すぞ」

「ひっ……………」
「ご、強盗ですか……………」
「えっと、お金なら……………」

「あー違う違う、お金とかどうでもいいの」
「この会社、外から見てて可愛い子多かったからさ……………」
「隠しカメラ仕掛けようと思って来たんだよね」
「トイレとか休憩室に、ね」

「それ、盗撮……………」
「へ、変質者……………」

「まあそういうことだね」
「そしたらこんな美少女が二人、残ってるなんて……………」
「ちよつとビビったけど、むしろラッキーだよなあ……………」
「へ、へ……………」

「え……………」
「な、なにを……………」





「よし、カメラ回すよ」
「じゃあまず自己紹介からして、
名前と年齢ね」

「自己、紹介……?」
「なんでそんなこと……」



「いいから言われたことに従ってね」
「逆らって刺されたいの?」

「は、はい……涼風青葉です、18歳です」
「た、浦本ひふみ……24歳です……」



「おいしいねえ、若い子と食べる頃の子と」
「最高の組み合わせだな」

「……………」
「た、食べる頃……」

「それじゃ……脱いで」
「一枚ずつゆっくりね」

「っ……」

「え……」

ぬ、脱ぐって……」

「そのまんまだよ、着てる服脱いでって」

「まずスーツとスカートからね。」

どんなパンツはいてるかチェックしてあげるよ」

「っ……」

「ぞ、そんなこと……」

「え、できないの……?」

「……どこか」「二箇所刺しちゃう?」

「そうしようか、腕か足あたり」

「ひっ……」

「わ、わかりました……」
だから乱暴は……」

「そうそう、素直に言うこと聞けば手荒なことは
しないであげるからね」





「うう……」
「……」

「おー、いいねいいねー」
「ひふみちゃんは白、青葉ちゃんは薄ピンクかあ……」

「青葉ちゃんのブカブカのシャツ、萌えるなー」
「ひふみちゃんの張った胸もたまんねえよ」

「そんな、こと……」
「……変態」

「じゃあ次はシャツね」
「下着姿、見せてもらおうかな」

「そんな……」
「あ、青葉ちゃん……」

「ほら早く、痛い目遭いたくないでしょ」
「拒否したら刺されるってこと忘れないでね」

「……はは」
「……」





「……………恥ずか、しい」
「男の人の前で、こんな……」

「期待通りの可愛いらしい下着に、
豊満な体にシンプルな白下着……」
「どっちもたまんねーなおい」

「うう……………」
「そんな、見ないでください……」

「いやあ、見るために脱がしたわけだし」
「下着姿だけで見抜き余裕だな」

「……………」
「変なこと、言わないで……」

「あの、もういいですか……」
「早く、服を……………」

「いや、何言ってるの?」
「これからがお楽しみでしょ」

「え……………」
「これから、って……」





「当然、下着も取ってもらおうよ」
「まずブラからねー、乳首解禁で」

「っ……」

「そんなの……む、無理……」



「いや無理とかないから」

「やらなきゃ刺すって言ってるでしょ？」

「それに今撮った下着姿もネットに流しちゃうよ」

「こっちの脅迫材料は増えてるんだからね」

「うう……………」

「……………」



「さ、諦めてホック外して」
「へ、へへ……ほらほら」

「そんな、な……………」

「いやだよ……」



「もう、いや……」
「み、見ないで……」

「やべ……めちゃくちや興奮してきた」
「へへ……貧乳と巨乳、どっちもいいねえ」



「しかし二人共、綺麗な乳首してるね……
意外と遊んでないのかな？」

「こんだけ可愛いし、男とやりまくりじゃないかと
不安だっただけ……」

「や、やりまくりって……
「そ、そんなのしたことありませんっ……」



「え、マツ……」
「おいおい、処女かよ……ますます興奮してきたよ」

「あ……」

「ひよっとして、ひふみちゃんも？」
「っ……」



「ひふみちゃん、男性経験は？」

「う……………そ、その……………」

「正直に答えないと、青葉ちゃんも酷い目に遭うよ」

「……………な、ない……………です」



「うわ、まじかよ」

「こんなエロい体して処女とか奇跡だろ……………」

「ううう……………」

「じゃあ最後の一枚、パンツも脱いでねー」

「二人の処女マン見せてもらっちゃおうかな」



「……………」

「いや、ですよ……………」

「ん？だから拒否権とかないの」

「痛い目に遭った上、今の姿ネットに流れもいいの？
ほら、パンツ下ろして」

「……………はら」

「う……………う……………」



「っ……………」
「……………」

「はー…さすが処女、綺麗なもんだなー」
「へへ、男で俺たちが初めて見るわけか」
「そう考えると興奮もひとしおだな、ひひ…」

「もう……………だめ…」
「あの…も、もう服着てもいいですよね…」

「いや、ダメに決まってるでしょ」
「何言ってるの？」

「え……………」

「こっちは青葉ちゃんとひふみちゃんの裸のせいで、
ギンツギンに勃っちゃってるんだからさあ」
「責任取って二人の体で鎮めてもらわないとねえ…」

「……………」
「……………」





「ま、待って……!」

「ん?」

「あ、青葉ちゃんには何もしないで……
わ、私に……して、いいから……」
「……!」

「へえ……」

「後輩をかばって、いい先輩だね!」

「へへ、そういうことなら望み通り……」

「そんな、ひふみ先輩……」

「だい、じょうぶ……だから……」

「で、でも……」

「じゃ、青葉ちゃんは腕縛っておくね!」

「あ……」

「へへ、それじゃお楽しみの時間だ!」

「この体好きにできるとか、たまんね!な!」

「……」



REC



「うほお、やわらか…指が沈み込んでく」

「う、うう………」

「ひふみ先輩……」

「だ、大丈夫……だよ……」

「もっちもちで、ほんと最っ高♪」

「揉まれてるおっぱい、ちよーエロいよ」

「ん……や……」

（気持ち、悪い……）

でも、我慢……しないと……）

「髪もいい匂いするなあ……」

「おっぱいの感触と匂いと、両方で興奮する」

「美少女ってほんと、たまらん香りだよなあ……」

「そりゃ襲いたくもなるっつてもんだよ」

「……っ！」

（ほ、ほんとに、気持ち悪い……!!）

なに……この人たち……）

● REC



「ん……んう……」

「はあー、柔らかくて張りもあって……」

「ずっと揉んでられるよこのおっぱい」

「これを男に揉ませたことないとか、勿体なすぎる」

「まったくだよね……」

「その分、俺がしっかり揉みしだいてあげるねー」

「や、あ……いら、ない……」

「声も可愛いなあ……」

「もっと聞かせてよ、ほら」



「あっ、んんっ……
い、いたい……」

「ふ、へへ……」

「なんかいじめたくなるなあ、ひふみちゃんって」

「嗜虐心がきたてる表情と反応するよなあ」

「やめ、て……」

「あーほんと可愛い……ほれほれ」

「あっ、やっ……」

REC



「っ……い……？」

「それじゃ、俺はこっちの味見を……」

「な、あ……やつ、やあっ……！」

(何……？何、してるの……この人……！)

「うへ、へ……ちよつと臭うけどそれもたまんねえや」

「や、や、やだ……っ」

「よく濡らしといてあげるからね」

「や、あ……やだっ……！」

そ、そんな……っ……っ……っ……！」

(あそこに、舌が……き、気持ち悪い……！)

「へへ、ひふみちゃん固まっちゃてるじゃん。

下の方はよくほぐしといてやれよ」

「おっけー」

「あ、あ……っ……っ……やあー！」

● REC



「やだ……やだあ……」

「へ、へへ……」

またそんな、興奮させる声出しやがって……」

「ほんとたまんねえよな……」

経験ないとか信じられねえって」

「こんな男を誘うためのような声と体してなあ」

「う、うう……」

（そんな、勝手なこと……）

「ていうか、俺もう我慢できねえ……
ギンギンに勃ちすぎて暴発しそう」
「え、ひふみちゃんの処女は俺が欲しいんだけど……」

「ん、んや……」

「あ、じゃあひふみちゃん仰向けに寝転んでよ」

「え……な、なに……」

「そのおっぱいの有効利用だよ」



「んっ……んん……
いやあ……」

「や、やべえよこれ……
よすぎる……ふ、へへ……」

「これ、が……男の人の……
うう……気持ち悪い……」

「極上の感触だよ……
どんなオナホより気持ちいいわ」

「あんまり、擦りつけないで……
やめ、て……」

「無理言わないでよ……
こんなの、止められるわけないでしょ」
「そうそう、ひふみちゃんのおっぱいは
こうするためにあるもんだしねえ」

「そんな、わけ……」

「おおお……だめだ、もう……」

「え……あ……」



「きゃっ……
やあっ……」

「お、ふうふう……」

「え……これ……」
「ねばねばして、臭い……
これ、が……精液……?」

「あーっ、最っ高……」

「早すぎる」

「いや仕方ないって、顔も声も乳も最高すぎるもん……
精子搾り取るために生まれてきたレベル」
「へへ、まあたしかに」

「……」

「最低……」

「じゃ、顔拭いてあげようね、
初体験は綺麗な状態でしたいよね」

「……」



「あっ……あ……」

「はあっはあっ……マジで興奮するな……」

(初、体験……ほ、ほんとに……
こんな、人と……)

「今お尻に当たってるのが、ひふみちゃんの
初めてのお相手だよー」

(ぐにぐにして、熱い……こんなの、が……
は、入るの……?)

「あー……擦り付けてたら出ちゃいそうだし
それじゃ、そろそろ……」

「っ……いや、やだ……許して……」

「ここまできて止めれるわけないでしょ」
「それとも、青葉ちゃんに代わってもらおう？」

「っ……そ、それは……
ダメ……」

「ひふみ先輩……」

「じゃ、そういうことで……」

「っー」

REC



「や、あああつっ……………!!」

「へっへ…処女喪失おめでとー♪」
「24で卒業できて良かったよね」

「うう…いた、い……
痛いよ……………」

「破瓜の痛みだね、一生の記念だから
ちゃんと覚えておいてね」

「そん、なの……………や」
（今、すぐ…忘れたい……………
こんなの……………）

「嬉しいなあ、ひふみちゃんの初めての男になれて」
「これは責任取って結婚してあげなきゃな」
「それありかも…毎晩この体楽しめるんだもんな」

「うっ……………うっ……………いやあ」

「で、どう？ひふみちゃんの膣内……………」

「へへ、期待以上……………」
程いい締めまりで絡みついてきて最高」

「や、あ…抜い、て……………」

REC



「じゃ、ゆっくり動かしてあげるねー」

「んっ……んうっ……あぁっ……!」

「ひ、ひふみ先輩……」

「青葉ちゃん……見ないで……!」

「はぁ……たまんねえ、たまんねえよ……!」

「あっ……あぁっ……や、あっ……
う、動かさ……ないでえ……!」

「無理、こんなの勝手に動いちゃうって」

「うぁっ、あっ……
(出し入れされてる感覚が……
気持ち、わるいっ……)」

「見た目だけじゃなく、膣内までこんなシコいとか……
最高すぎだよひふみちゃん」
「まさに超最高級のオナホだな」

「ひどい……そんな、あんっ……!」

「おらっ、オナホが勝手にしゃべんな」

「ふぁっ、あっ……そんな、強くっ……あぁっ……!」

REC



「あ、やば……もうっ」

「え……っ!」

「あーあ、よすぎてもう出ちゃったよ」

「え……え……?」

(太ももに、熱いのが伝って……)

「う、そ……こ、これ……」

「へへ……中出ししちゃったよ」

「っ……!」

(そ、そんな……これ、赤ちゃんが……)

「まあひふみちゃんも俺との子供、欲しいでしょ?」

「初めての相手なわけだし」

「当然だよなあ」

「い、いらない……そんなの……」

あ、ああ……」

「よし、出したなら代わって代わって。」

俺もひふみちゃんの膣内早く堪能したい」

「も……やああああ……」

REC



● REC



「そ、それじゃあ……俺は可愛い顔とおっぱい、堪能しながら挿れさせてもらうよ」

「もう、や……やめて……」

「そういうの逆効果だって……ますます勃っちゃうだけだから」

「そんな……」

「さっきパイズリで出したのに、ひふみちゃんがエロ過ぎてもう完全回復してるもん」
「ほんとシコいなあ、ひふみちゃんの体」

「ううう……」

「それじゃいただきます、と——」

「やっ、あっ……!」

● REC



「ふあ、あぁっ……………」

「く、ふうう……………これ、たしかにたまらんな」
「だろ、本当に男の精子搾り取るための体だよ」

「あっ、ふあっ……………」

「はああ…乳はもちもちで膣内はきゅうきゅうで、
どうなってんだよこの体…」

「い、たい…抜いて……………」

「まだ痛い？」

「でもこっちは最高に気持ちいいから動いちゃうねー」
「痛がるひふみちゃんも可愛いから仕方ないよな」

「あっあっ……………んんっ、うあぁっ……………」

「く、うう……………もう、出すぞ」

「あっ、だめ……………抜いっ……………」





「ふあ、あぁっ……また……」

「お、おお……また大量に出たよ」

「これ、本当に孕んじゃうかもね」

「そんな……いや……」

（絶対、避妊して……病院、行かないと……）

「あー……最高だった……」

「とりあえず一回スッキリできたな」

（でも、これで……）

「よし、じゃあ次青葉ちゃんいこうか」

「！」

「……………え？」

「ロリ好きの俺の本命はこっちだしな……
可愛がってあげるよー♪」

「ひっ……」

「な、なんで……」

「青葉ちゃんには、何もしないって……」

「スッキリはしたけど、まだ全然出したりないからね」
「ていうか、当然元々犯るつもりだったし」

「そん、な……あ、やめて……」

「やっ……来ないで……」

「あっ……やあっ！」

「うへへ……ひふみちゃんのとちやシコな体も最高だけど、このつるぺたな体もたまらないなあ……」

「やっ……ああ……」

（男の人に、さわられてる……！
き、気持ち悪いっ……！）

「薄い胸に小ぶりなお尻、幼児体型たまんねえよ」

「背徳感あってこれまた興奮する画だな」

「へ、変態……！」

「ひひ、その変態に今からたっぷり弄ばれちゃうんだよ」

「はあ、はあ……肌ふにふにすべすべで最高……」

「やっ、いやっ！離してっ！」

「いいねえ、その無駄な抵抗」

「ひふみちゃんもだけど、青葉ちゃんもまた違ったタイプで
いじめたくなるなあ」

「っ……」

（何、言っても……無駄なんだ……）



「しっかし、子供みたいなすじマンだねえ青葉ちゃんの」
「18歳とは思えないよなあ」

「っ……し、知らないです」

「せっかくだしスマホでも撮るところかな、ドアップで」

「っ……」

「お、それ後で俺のスマホにも送っというて。
待ち受けにしたい」

「へへ、それいいな……俺はひふみちゃんのをしようかな」

「やあっ……！ な、何して……」

やめてくださいっ！

「やめないよし、ズームで激写っ……」

「う、ううう……」

「こんな近くで、撮られてる……私のあそ……」

「それに記念に撮っておいた方がいいでしょ？」

「この後、処女じゃなくなっちゃうんだから」

「後で比べてみるのもいいな、使用前と使用后」

「な……そ、そんなこと……」

「私、ほんとに犯されちゃうの……こんな、人たちに……」



「お、お願いします……
それは……それだけは、許してください」

「……だってさ、どうするっ？」

「いや許すわけ無いでしょ……」

もう俺が青葉ちゃんの処女もらうのは確定だから」

「そん、な……」

「でもお前欲張ってひふみちゃんにも二発出しただろ？」

もうきついんじゃないかねえの」

「まったく問題ない、こんなロリ美少女前にしてんだぜ……
体さわってるだけでももうガッチガチだよ」

「ひっ……」

（お、おしりに……何か、当たって……
こ、これ……）

「へへ……青葉ちゃんの小さなおしりに当たってるだけで
射精しそなくらい気持ちいい」

「き、気持ち悪いです……」

そんなの、当てないでください……」

「気持ち悪いはひどいなあ……」

じゃあ挿れる前にちよつと慣らしとこうか」

「え……？」



● REC



「ひっ……!?」
「な、あっ……な、なににして……」

「青葉ちゃんのすじマンで素股、と……
ひふみちゃんの乳もよかったけど、こっちもたまんねえ」
「たしかに青葉ちゃんは足だよな」
「正直ミニスカスーツの時点でムラムラしてたし」

「あっ、ああ……」
（ぐにぐにしたのが、擦りつけられて……
ぬるぬるして、気持ち悪い……）

「ふ、へへ……青葉ちゃんの足の感触気持ちよすぎて、
先走り汁止まらねえよ」

「い、や……気持ち悪いっ……」

「そんなこと言っちゃだめだよ……
ほら、すじも擦ってあげるから」

「やっ、やあっ！
やめ、て……っ」

● REC



「薄い胸もいじってあげるからねー」

「い、いらないです…やっ…!」

「つるつるのすじの感触に、少しだけ膨らんだ胸…

やっぱロリって最高だな」

「それも青葉ちゃんは18だし、合法ロリだからな」

「○学生にしか見えないけど」

「……………」

（うう……気にしてること、こんな人たちにまで
挿入されるなんて……）

「はあ……こんな子を裸に剥いて素股できるなんて
ほんと天国だな」

「まったく、イーグルジャンプ様々だよ」

「ソフトは買わないけど」

「っ……何が、天国なんですか……!
もう、やめてください……」

「へへ、だから止めるわけないでしょ……
……っと、やべっ」

「……………」

● REC



「ふう…気持ちよすぎて射精しちゃうところだった」

「おいおい、あぶねーな」

「青葉ちゃんの太ももが良すぎるんだよ」

「え…な、なんで…」

「いや、青葉ちゃんの処女もらう前戯としてやってるのに
出しちゃったら本末転倒でしょ」

「っ…!」

「それに、出すならやっぱり膣内じゃないと」

「青葉ちゃんには俺の子供孕んで欲しいし、できるだけ
濃いの出さなきゃだしな」

「そん、な…こ、子供って…」

（この人たち、本気なの…?）

「さ、素股でもうバッキバキだし…」

「いよいよ青葉ちゃんも、初体験の時間だよー」

「ひっ…」

（う、うそ…うそ…うそ…）



「やっ！やだ、やだっ……！」

「暴れるなって……もう諦めなよ」

「わがまま言うっちゃだめだよ、青葉ちゃん。
キミの先輩だって我慢したんだから」

「っ……、それは……」

「は……盗撮しにきただけなのに、ロリツイメンテの娘の
処女がもらえるなんて……ほんとうらってるなあ」

「っ……」

「やっばり、いや……」

「こんな人が、初めてなんて……」

「や、やめてください！いやです！

だ、誰か……」

「や、やめて……！」

「青葉ちゃんに、ひどいことしならぬ……」

「へへ……誰も来ないし、絶対やめないから。

それじゃ——いただきます、と」

「あ——」





「や、あああああつ……………」

「はい、処女卒業おめでとー♪」

「く、あ……………きつ、これ奥まで入らないかも」

「いた、いたいよ……………や、あ……………」

「う、おおお……………食らちぎられそう……………」

「締め付けキツすぎて、こつちも痛いくらいだよ」

「まあこの体だしなあ、でもそれはそれで楽しみ」

「抜いて、ください……………お、ねがい……………」

「へ、へ……………」

「泣き顔でそんなこと言われたら、キツキツだけど」

「腰が動いちゃうって……………」

「喜ばせるために言ってると思えないもんない、しゃーないわ」

「あ、やああつ……………あつ、うあつ……………」

「ひ、ひどい……………」

「ひふみ……………せんぱら……………」





「んっ、ふぁっ……あっあっ、あぁっ……」

「あー〇学生犯してるみたいで背徳感やべえ」

「へへ、違法ホルノみたいな画だよな」

「でも合法ってのがいい」

「あっ、あっ……んんっ……」

（レイブ、なのに……合法って……）

「くっ……最高だらら……」

青葉ちゃんの泣き顔と喘ぎ声……」

「うっっ……あっ、んんっ……」

（こんな、最低の人が……私の初めて……）

「ほら、どう？初セックスの感想は……」

「最低、です……ふっっ、んんっ……」

「えー……こっちは最高なんだけどな……」

「おらっ、これでどうだっ……」

「やっ、あっ……」

「そんな、激しっ……うあっ、あっ……」



● REC



「ぐ、もう出そう…
締め付けキツすぎて全然もたない」

「……………
で、出そうって……あつ、な、なに……」

「そんなの聞くまでもないでしょ……」
「もちろん精子……つまり俺の子種だよ。
さっき孕んでもらうって言ったじゃん」

「……………」

「青葉ちゃんの子供、可愛いだろうなあ……
女の子だったらいいなあ」

「や、やだ！ いやっ、やだ！
それだけは……やめてー」

「へへ……だから今更そんなこと聞くとどう？」

「ひっ……そ、そんな……やだ、やあつ……」

「よし、一番奥で……」

「っ——」





「あ、ああああ……………」
（ほんとに、中で……………赤ちゃん、できちゃう……………）」

「く、ふうう……………最高だったあ……………」

「へへ、三発目と思えないほど出てるな」

「これだけロリで可愛い子でしかも処女だぜ……………
そりゃ精果もフル稼働よ」

「……………」

（やだ、よ……………んなの……………）」

「青葉……………ちゃん……………」

「よし、じゃあ代わってくれ」

「え……………まだ硬いままだから、このまま抜かずに二回戦
いきたかったんだけど……………」

「おいおい……………俺も青葉ちゃんの膣内、味あわせてくれよ」

「う……………ん……………じゃあ俺はまたひふみちゃんの膣内使うか」

「……………」

「そんな……………もう、やだ……………」

「これくらいで音を上げちゃダメだよ」

「まだまだ二人の体、楽しみ足りてないんだから」

「いやあああ……………」



● REC



「……」

「お、青葉ちゃんはまだ反抗的だねえ」
「そんなこと言う子には、おしおきで強く突いちやおうかな」

「んっ、やつ……もう、や……」
「ふあっ、あっ……最低、です……」

「へへ、たしかに青葉ちゃんの膣内きつすぎてやばいな」
「ひふみちゃんの体もやっぱいいわ、この揉みごたえある乳……」
「ほんと、今日忍び込んでよかったな……」
「こんな美少女二人を好きにできるなんてなあ、人生最高の日だよ」

「ああっ……あっ、やあっ……」
「んっ、んんっ……あっ、んっ……」





「おし、麗しい友情だねえ」
「それじゃ最後まで仲良く二人に中出ししよと…」
「う……」
「やあっ」

「う、うう……ごめんね、青葉ちゃん……
私……何も、できなくて……」
「そんな、私だって……」
「ひふみ先輩、守ってくれたのだ……」
「へへ、互いの喘ぎ声たまんねー」
「最高のBGMだな」



「うあっ、やっ……あっ、あっ……」
「や、やめて……青葉ちゃん、苦しそう……」
「へへ、人の心配なんて余裕だねえ……
じゃ、こっちも激しく動かしちゃうよー」
「ああっ……んっ、あっ、ふああっ……」
「ひふみ先輩……」

● REC



「あつ、あぁ……………」
「また…膣内に……………」

「ふー、出した出した」
「最っ高だった…」

「う、う……………」
「なんで、私たちが…………こんな目だ……………」

「そりゃまあ可愛いんだから仕方ないよね」
「可愛い女の子は、男の性欲満たすためにいるんだから」

「……………」
「そんな、めっちゃくちゃなこと……………」

「あ、分かっているとと思うけど警察とかに言っちゃだめだよ。
そんなことしたら、この映像がネットに流出しちゃうからね」
「自分だけじゃなく、隣の子の人生も壊れちゃうからね！」

「……………はら」
「わかり、ました……………」



あの日から数日――
私に知らない番号から電話がかかってきた。

「あ、青葉ちゃん？久しぶりー♪」

「っ……！」

声だけで怖気が走る。

忘れようと思っても忘れられない、最低の男の人たちの声。

「ちよっとお兄さん達、青葉ちゃんの体が忘れられなくてさあ。

今日の夜、××ってホテルまで来てくれないかなー」

「そんな、こと……」

「え、こっちが動画撮ってること忘れたの……」

「……………」

「まあ、どうしても嫌ならひふみちゃんに頼むけど」

「っ……………わ、わかりました。

行きます、××ですね……………」

「……………」

（また……前みたいなことされちゃうんだ、私……………
でも……………）

人見知りで男の人が苦手なのにひふみ先輩はあの時、自分を犠牲にしてまで私のことを守ろうとしてくれた……

……もう、ひふみ先輩をあんを目に遭わしちゃいけない。

今度は、私が先輩を守らないと……………



「んむ、んっ……んん……っ」

「ふうう……いいよー、青葉ちゃん」

「ん、んう……」

（気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪いっ……!）

「はああ……ロリっ子に無理やりしゃぶらせるの、
最高に興奮するなあ……」

「……………」

（やっぱり最低だ、この人たち……）

「ほら、舌も手ももっと動かして……」

「俺が気持ちよくなれるよう、しっかりご奉仕してね」

「んう、んっ……」

（こんな人たちの言いなりになって……）

「エ、エッチなことしなきゃいけないんで……」



「ほら、もっと奥までくわえてよ」

「んあ……ふう、むりです……」

(苦しいし……臭い、この人……)

「ふーん……」

青葉ちゃんが無理なら、ひふみちゃんに頼もうかな……」

「っ……ま、待って……」

やります、頑張ります……」

「そうそう、最初から素直にそう言ってくれないと」

「優しい先輩を辛い目に合わせたくないよねえ？」

「ん……んうう……」

(本当に汚い……)

でもひふみ先輩にだけは、もう……)

「おう、ふ……そろそろ……」

「っ……」





「んぐっ…ん、んうう……………」

「吐き出しちゃダメだよ…
精子飲み込むまでがフェラなんだから」

「……………」

(うううう……………)

臭くて、苦くて…気持ち悪い…っ)



「たまらないな、くわえさせて飲ませるの…」

支配してらって感じがして最高」

「へへ、奉仕させてる感じがしていいな」

「……………」

(奉仕……………)

こんな気持ち悪い人たちに……………)

「よし、じゃあ本番いこうか」

「俺の上にまたがってねー♪」

「……………はい」

(いやだよ…ひふみ先輩……………)

● REC



「あっ、あっ……ふあっ……」

「ふへ、へ……」

小柄な体、下から突き上げるのクセになりそう」

「んんっ……あっ、苦し……」

「くう……騎乗位だとただでさえキツい膣内が、
余計にきゆうきゆう締まってくる……」

「マジか……次は俺も試すかな」

「く、あ……やっ、あっ……」

(こんな……ものみたいな扱い……)

「あー……青葉ちゃんが泣き顔で喘いでるのを見ると
ほんと興奮するなあ」
「へっへ、最低だな……でも分かる」
「うう、ううう……」



「んっっ、んっんっ……」

「ほら、もっと自分から腰振って」

「下だけ意識しないで、手の方もちゃんと頼むよ。
しっかり握ってこすって」

「ふあっ、あっ……」

「そんな、も……むりっ……」

「無理ならひふみちゃん呼ぶだけだよ」

「俺たちはそうしてもいいんだからね」

「っ……」

（また、この脅し……）

（……でも、逆らえないよ）

「く、うう……」

「こう、ですかっ……っ」

「お、そうそう……いいよー青葉ちゃん」

「へへ、最高だよ……」

「んっ、あっ……はあっ……」

（なんで……私、こんなことしてるの……）



REC

「おお、出る……」
「く、くちも……」

「あ……ふあ、あ……」
「当たり前みたいだ、膣内は……」
「それだ、顔にも……汚いよ……」

「ふし、精液吸い上げられた……」
「じゃあ次は俺が騎乗位で……」

「そんな……少し、休ませてください……」

「ダメダメ、こっちまたがって」

「今日は夜通し可愛がってあげるからね」

「ひひ、何回中出しできるかなー」

「っ……うう……」

（涙が溢れるくらい辛い……けど……
ひふみ先輩には、もうこんな思いはさせない……!）

「よーし、下から突きまくってやる」

「俺のは口でお願いねー」

「わかり、ました……」



REC



私と青葉ちゃんが、誰にも言えないような目に遭ってからしばらくして――
登録してない番号から電話がかかってきた。

（多分、あの男の人たちだ……）

なんとなく、それが分かった。

（……出たくない）

けど、そうすれば青葉ちゃんに連絡がいくかもしれない……
そう考えると結局出るしかない……

「あ、ひふみちゃん？ 久しぶりだねー」

「……………」

やっぱり……
聞くだけで怖気が走る、男の人の声。

「いやあ、ひふみちゃんのHな体をまた味わいたくなってるさあ。
このあと、××ってホテルにすぐ来てよ」

「……………」

「拒否すれば、青葉ちゃんに来てもらうからね」

「わかった、から……」

青葉ちゃんには絶対、もう何もしないで……」

「いいよー、約束するよ」

あの時、結局何もできず青葉ちゃんも酷い目に遭わせた……
青葉ちゃんみたいなのが、もうあんな目に遭っちゃいけない。
すこくいや、だけど……私だけですむなら……



「ん、んっ……」

「へ、へ……」

「最高だな、こんな美少女にくっついてさせるの」「たまんねえ光景だな」

「ん、あう……」

（気持ち、悪い……）

（こんなこと、したくなら……）

「押し当たってるおっぱいの感触も最高だし……」

「相変わらずシッコいなあひふみちゃんは」

「国宝級のエロさだよなこれ」

「……………」

（話す言葉も、気持ち悪い……）

（なんで、こんな人たちがいるの……）

「うお、おおっ…………おっ……」

「んむっ、んうっ…………」

「うう…………まずくて、気持ち悪い…………
これ、飲み込むなんて…………」

「大量に精子出たな…………」

「風俗嬢のフェラなんかよりよっぽど興奮したよ」

「……………」

「だ、め…………気持ち悪くて、吐きやう…………」

「ダメだよ、ちゃんと飲んでくれなきゃ」

「…………青葉ちゃんなら飲んでくれるかな」

「……………」

「は、あっ…………口の中…粘ついて、苦…………」

「おーよくできました」

「じゃ、ご褒美に下の口にも挿れてあげるね」

「…………」





「ふあっ……あっ、ああっ……」

「相変わらずいい締まりしてるね、最高の体だよ」

「んっ……んっ……」

「下から、されると……奥まで突かれてる感じ、して……っ……お腹、苦し……」

「へへ、騎乗位だと乳揺れも堪能できていいな」

「回と膣だけじゃなく、視覚的にも興奮させてくれて……ほんとドスケベボディだな」



「ふうっ……ん……」

「少しも、嬉しくない……」

「ひふみちゃんもそろそろ慣れてきたよね……」

「こっちはばっかさせてないで、自分でも腰動かしてよ」
「性奴隷としての自覚を持ってもらわなきゃねえ」

「自分で、なんて……そんなこと……」

「それに……せ、性奴隷って……」



「なに、できないの……」

「……青葉ちゃんなら『生懸命やっつくわさうだけ』となあ」

「ま、待って……！ します、から……」

（うう……ほんとに、卑怯……）

「ほら、俺のモノに合わせて腰振って」

「っ……うあっ、あっ……あんっ、んっ……」

（苦しい、けど……不快感、だけじゃなくなっ……
何か、変な感覚が……）



「お、いらしゃー……」

（くっ……搾り取られる……）

「ひふみちゃんも声に艶出てきたんじゃない？」

「そんな、こと……やっ、ふあっ……んんっ」

（なん、で……私、こんな声……）

「あ……そんな声出されたら、もうっ……」

「や、あっ……」



「あっ……あ、あ……」
（また……臆肉だ、たぐひを吐いて……）

「ふー……吸い上げられた……
前の時も思ったけど、やっぱり騎乗位最高だな」

（……前の、時……）

「よし、じゃあ第二ラウンドとらるか」

「選手交代っ」と

「え……こそ、そんなすぐっ……」



「きついなら、もう一人増やすことになるけど？」

「それが嫌なら、頑張ってもらわないとね」

「……はら」

「へへ、今日は朝までやりまくるぞー」と

「数日オナ禁したから、まだまだ出せるからね」

「っ……」

（青葉ちゃん……今度こそ、ちゃんと守るから……）

● REC



「やつ、あつ、ああつ……」
「んっ、んんっ……ふあつ……」

「やっぱり揃えて犯すのが一番興奮するな」
「違う、交互に違った味楽しめるのが最高」

「う、うう……なん、で……」

「青葉ちゃんに……」

「んっ、あつ……」

「ひふみ先輩には、何もしないって……」

「いやーごめんね、それただの嘘だから」
「ていうか両方犯さないわけないじゃん」

「く、あうっ……人でなしっ……」

「ふ、うう……最、低……」



「へへ…ひどいこと言うなあ」
「でも、その人でなしで最低の男たちに
種付けされちゃうんだよー二人とも」
「こんだけ出しまくってりや避妊しても
できちゃやう可能性高いと思うよ」

「っ…そんな…」
「絶対…いい、やつ…」

「嫌がられるとますます燃えるな」
「ああ、絶対孕ます」

「っ…」
「やめ、て…」

「いやあ楽しみだなー二人の子供…
めっちゃくちゃ可愛いだろうなあ」
「じゃあ子供の顔見るためにも、今日も
三発ずつは出しちゃおうかなー」

「うあっ、あっ…やめっ、ああっ…」
「んんっ、ふっっ…ふあっ、あっ…」



「おら、まず青葉ちゃんの膣内に一発目……!」
「こっちも、ひふちゃんに種付け……っ」と

「っ……やああ……」
「んっ……ああ……」

「はー、何度犯っても飽きないなあ」
「くへへ……まだまだずっとなしめそうだねー」

「そん、な……」
「やだよお……」

「……ごめんね、青葉ちゃん……結局、私……
何もできなくて……」
「そんな……私だって、ひふみ先輩が守ってくれたのに……
何も、返せなくて……」

「まあまあ、これからは二人仲良く可愛がってあげるから」
「そうそう、それじゃ交代して二回戦いこうか」

「あ、や……もう、許して……」
「いやああああ……っ」





青葉ちゃんとひふみ先輩が泊まり作業中にやってきた
変質者に陵辱されちゃう話

—— おわり

◦ 補足

- 青葉の18歳という年齢はコミック1巻～3巻時点のものです。
- ひふみ先輩が(1巻～3巻時点で)24歳というのは、初期設定や作中の情報から推測して有力とされる年齢で公式の年齢ではありません。ひふみ先輩の年齢は原作でも不明のままです。
- 二人が処女なのは公式です。



18歳!

24歳?



変質者にいいように使われてしまおう



.....

「青葉ちゃんのおじマンで果敢」と……
ひふみちゃんの乳もよかつたけど、こっちはたまんねえさ
「たしかに青葉ちゃんは足だよな」
「正直ミニスカスリーツの時点でムラムムしてた」



「あっ、ああ……」
（ぐにぐにしたのが、擦りつけられて……）
ぬるぬるして、気持ち悪い……
「ふ、へへ……青葉ちゃんの足の感触気持ちよすぎて
先走り汁止まらねえよ」
「ひ、や……気持ち悪い……」
「そんなこと言っちゃだめだよ……
ほら、すじも擦ってあげるから」
「やっ、やあっ……」
「やめ、て……」

青葉ちゃんとひふみ先輩のHな受難



「やっ、あ……」
「さっきパイズリで出したのに、ひふみちゃんが
エロ過ぎてもう完全回復してるもん」
「ほんとしンコいなあ、ひふみちゃんの体」
「ううう……」
「そんな……」
「そういうの逆効果だって……
ますます勃ちちゃうだけだから」

最低です……



変質者にいいように使われてしまおう



……っ

「青葉ちゃんのおじマンで果敢」と……
ひふみちゃんの乳もよかつたけど、こっちはたまんねえさ
「たしかに青葉ちゃんは足だよな」
「正直ミニスカスリーツの時点でムラムムしてたし」



「あっ、ああ……」
（ぐにぐにしたのが、擦りつけられて……）
ぬるぬるして、気持ち悪い……
「ふ、へへ……青葉ちゃんの足の感触気持ちよすぎて
先走り汁止まらねえよ」
「ひ、や……気持ち悪い……」
「そんなこと言っちゃだめだよ……
ほら、すじも擦ってあげるから」
「やっ、やあっ……」
「やめ、て……っ」

青葉ちゃんとひふみ先輩のHな受難



「やっ、あ……」
「さっきパイズリで出したのに、ひふみちゃんが
エロ過ぎてもう完全回復してるもん」
「ほんとしコいなあ、ひふみちゃんの体」
「うう……」
「そんな……」
「そういうの逆効果だって……
ますます勃っちゃうだけだから」

最低です……





REC



REC



REC



REC



REC



REC



REC



REC



REC



REC



REC



REC



REC



● REC



● REC



REC



REC



REC



REC



● REC



● REC



● REC



REC



REC



REC



REC



REC



REC



● REC



● REC



● REC



● REC



● REC



● REC



● REC



● REC



あの日から数日――
私に知らない番号から電話がかかってきた。

「あ、青葉ちゃん？久しぶりー♪」

「っ……！」

声だけで怖気が走る。

忘れようと思っても忘れられない、最低の男の人たちの声。

「ちよっとお兄さん達、青葉ちゃんの体が忘れられなくてさあ。

今日の夜、××ってホテルまで来てくれないかなー」

「そんな、こと……」

「え、こっちが動画撮ってること忘れたの……」

「……………」

「まあ、どうしても嫌ならひふみちゃんに頼むけど」

「っ……………わ、わかりました。

行きます、××ですね……………」

「……………」

（また……前みたいなことされちゃうんだ、私……………
でも……………）

人見知りや男の人が苦手なのにひふみ先輩はあの時、自分を犠牲にしてまで私のことを守ろうとしてくれた……

……もう、ひふみ先輩をあんまり目に遭わしちゃいけない。

今度は、私が先輩を守らないと……………

● REC 



● REC 



● REC



REC



REC



REC



私と青葉ちゃんが、誰にも言えないような目に遭ってからしばらくして――
登録してない番号から電話がかかってきた。

（多分、あの男の人たちだ……）

なんとなく、それが分かった。

（……出たくない）

けど、そうすれば青葉ちゃんに連絡がいくかもしれない……
そう考えると結局出るしかない……

「あ、ひふみちゃん？ 久しぶりだねー」

「……………」

やっぱり……
聞くだけで怖気が走る、男の人の声。

「いやあ、ひふみちゃんのHな体をまた味わいたくなってるさあ。
このあと、××ってホテルにすぐ来てよ」

「……………」

「拒否すれば、青葉ちゃんに来てもらうからね」

「わかった、から……」

青葉ちゃんには絶対、もう何もしないで……」

「いいよー、約束するよ」

あの時、結局何もできず青葉ちゃんも酷い目に遭わせた……
青葉ちゃんみたいなのが、もうあんな目に遭っちゃいけない。
すこくいや、だけど……私だけですむなら……







REC



REC



REC



● REC



● REC



● REC





青葉ちゃんとひふみ先輩が泊まり作業中にやってきた
変質者に陵辱されちゃう話

—— おわり